

心理学ライフ

旧車に乗るということは

滋慶医療科学大学大学院医療管理学研究科 教授

岡 耕平

以前にも心理学ライフの記事を書いたことがあるのに、また依頼をいただくとは……。と思い、調べてみたら以前書いたのは2013年（61号）でした。時の経つのは早いものです。そのときは子育てについて書いており、内容を要約すると「みんな優しい声をかけてくれるけど、実質的に手伝ってくれる人はいねえ」という恨み節をオブラートに包んだような内容でした。今回はそんな話ではなく、私が旧車に乗る理由について書きたいと思います。

うちは子どもが3人います。次男三男が双子で、長男と2歳しか離れてないものですから、幼い頃は大変でした。チャイルドシートを3台乗せられる車を、ということでステーションワゴンで、当時一番コスパが良いものを買いました。期待に届えてくれた良い車でしたが、欲しい車ではないものを買ったという気持ちが残りました。乗りたい車に乗りたい……と、「うまいもんはうまい」みたいな気持ちがずっとありました。

子どもが大きくなり、いよいよ車を乗り換えるか、というときに「我を通すならこのタイミングだ!」と思い、以前から憧れていた中古車、というか旧車に乗り換えることにしたのです。家族の反対は多少ありました。が、うちの妻も「今度買う私の車、オレンジとサテンホワイトのどっちが良いと思う?」と私に助言を求めてきたのに、私が「オレンジやな」と言ったらサテンホワイトを買った、というくらいの我を通す人なので、私も我を通させていただく

ことにしました。

購入したのは1995年製のメルセデス・ベンツ、S124というステーションワゴンです。結局ステーションワゴンなんかいい!というお叱りは甘んじて受けます。S124はベンツ社が儲け度外視の「最善か、無か」というポリシーで作っていた時代の最後の車です。人間工学の粋のような様々な工夫がたくさん見られ、研究者としての所有欲も満たしてくれます。なお、一応旧車ですが、1995年製というのは旧車界の最若手であり、ネオクラシックと呼ばれる界隈のものです。ちなみに、私はいま47歳で、老人界の若手として、同じネオクラシックとしてのシンパシーをこの車に持っています。

旧車に乗るためにはひとつの大きな壁があり、これを越えられない人は直ぐに新車に戻っていきます。それは「いつもどこかが壊れている、という状態に対する耐性」を獲得できるかどうか、です。例えば、私の車はいつも少しずつオイルが漏れています。最初のうちは「どうやったらオイル漏れを直せるのか。いくらかかるのか」とずっと不安でした。それがダメな思考なのです。「半分水の入ったコップ」を見て、あと半分しかないと思うか、まだ半分あると思うかといったような話です。オイルが漏れるのはオイルがちゃんと入っているからなのです。オイルが漏れているうちはOK! このマインドが大切です。旧車に乗る、ということは、自身の持つ「あたりまえ」の見直しであり、あたりまえの閾値が大幅



に下がることで、見える世界が変わります。世の中のいろんなあたりまえに感謝の念すら湧いてきます。

そんな私も、車から降りたときに右のウインカーがなくなっていたときにはさすがに焦りました。ウインカーがあるべき場所に何もなくて、ただ空間がそこにありました。空^{くう}が在る。悟りの境地に近いかもしれません。皆さんはウインカーがどこかに飛んでいってなくなる経験をしたことがありますか? いままで経験しなかったことを経験できる。それが旧車ライフです。

旧車に乗ると、五感をフル活用した運転ができます。異音、異臭、いつもと違うエンジンの振動、いろんなサインを常に意識しながら運転することになります。これこそが運転。自動運転の対極です。不調になるたびに原因を推測し、メカニズムを踏まえて実験し、問題の原因を特定し、メンテナンスをする。そう、これは心理学と同じです。旧車に乗るということは心理学ライフなのです。



おか・こうへい

博士（人間科学）。専門は認知心理学。特別支援教育学。著作に『発達障害の心理学 増補改訂版』（分担執筆、福村出版）、『月刊実践みんなの特別支援教育』連載「みたてラボ」など。